

仏教発祥の地インドの文化的土壌には、典型的な母系制社会があったといわれる。例えば、親に相当する語は「母と父」であって、「父母」ではなかった。それだけ母親が大事にされる社会であったことは疑いない。釈尊は、自身の生誕の七日後に母を亡くしたといわれ、仏教はその出発点より母への思いが根底にあり、人の生き方としての報恩が尊重されたのは当然であったとも言えよう。母系社会の特色は、人の心や文化を基調とするソフトパワーの重視にあった。

一方、中国社会、ことに黄河流域の北の方は父系制社会であり、ここでは、厳しい自然条件の中で、ハードパワーを重視する戦国時代が現出する。この戦国時代を勝ち抜いたのが秦であり、軍事力と経済力を背景とする強力な帝国であったが、その統一はあつけなく崩壊し、その後を受けたのが高祖劉邦の漢であった。漢代初期には無為を重んずる老子の思想が流行し、独自の文化が形成されるが、やがて武帝期を境として、中央集権国家へと体制を改め、ハードパワーの時代へと逆戻りする。

ソフトパワーを求める歴史の潮流

若江賢三

るのである。

中国の中でも、淮河より南の方では、母系制的な社会があつた。劉邦も、当初楚の項羽と連合していたことから知られるように、漢はむしろ南の要素を多くもつていた。しかしながら、武帝期以降、前述したように、ハードパワーの社会に逆戻りし、いわゆる儒教の国教化がなされる。後漢になると、社会は再び変化し、インドから仏教を受け入れていく。三国時代には、長江流域の蜀と呉が、南を代表する勢力として北のハードパワーの伝統を引く魏と対決し、一時的にはあれ、これを撃退した。これが、かの赤壁の戦いであつた。その後も中国史において、ハードパワーとソフトパワーが互いに絡み合いながら歴史が進展するのである。

ひるがえって、政治的にも経済的にも、人類史的な規模で行き詰まりを呈した今日、今後の社会においてソフトパワーの果たすべき役割が、改めて問われることになるであろう。

(わかえけんぞう／愛媛大学教授)